**B-2**　（個人発表　6 月 12(土)14:30～14:55　N214 教室）

# 失われた「男の甲斐性」

## ケニア・エンブ社会の動態とマウマウ戦争

**松岡陽子（名古屋大学大学院）**

ケニア・エンブ社会は1940 年代以前は一夫多妻制が広く見られ、一家の家長である男は複数の妻とその子どもたちに対する扶養義務を有していた。ところが、1950 年代のマウマウ戦争、60 年代の土地改革、63 年の英国からの独立を経て約半世紀経った現在、エンブでは男性が家族を扶養することが当然視されなくなってきている。特に近年の若いエンブ男性は自由な恋愛を謳歌し、恋人を妊娠させては、結婚を拒否し、また新しい恋人をつくっては同じことを繰り返すということが非常に多くなっている。また、たとえ男性が相手の女性と結婚しても、妻子を扶養するという意識が低いため、男性が稼いだ賃金は彼自身の遊興費に使われることが多く、実質的に家計を支えるのは女性になることが多い。クランや父親の権威が低下している現在のエンブ社会では、そのような男性を制裁する者は皆無に近い。エンブではたとえ隣の家の息子が自分の娘を、彼女の意に反して妊娠させたとしても、隣の家に抗議するような父親はいないのである。このため、エンブ社会では極めて多くのシングルマザーが出現しやすく、現在もその数は増加の一途である。

このような状況を後押ししている背景として、エンブにはシングルマザーが高い割合で見られる割には、一般的に男性が家族に対する「責任感」が希薄であるという現実がさほど認識されていないこと、そしてこのような件を裁く基準がクランの権威が失墜した現在、村の司法機関にないことがあげられる。クランに代わって、エンブの人々の価値観やモラルの構築に大きな貢献をしているのがキリスト教だが、しかし教会もシングルマザーのみを非難、もしくは一時的救済をするだけで、相手の男性にその「責任」を追求することはほとんどなく、根本的解決には至っていない。

エンブ男性が家族や恋人に対して「責任」をもつことを簡単に放棄し、シングルマザーが増大しているのは近年最も顕著だが、これは1960年代以降より徐々にそのような傾向性が強まっていった結果である。エンブのこのような状況はケニア全域に一様に見られる近代化の影響とのみ結論づけることはできず、エンブ固有の歴史、つまりマウマウ戦争というエンブ社会に大きな傷跡を残した出来事を無視することはできない。

マウマウ戦争とは、白人に広大な土地を奪われたキクユ人を中心に結成された秘密結社「マウマウ」による反政府運動を発端としたもので、エンブ・ランドもその戦地となった。マウマウ戦時中、青壮年の男性のほとんどは植民地政府よりゲリラ戦を行うマウマウ予備軍として捕えられ、収容キャンプに送られたが、彼らはそこで極めて過酷な生活を余儀なくされた。彼らは収容キャンプ内で「犬畜生」扱いをされ、手酷い暴力によって、二度と植民地政府に逆らうことができなくなるよう「馴化」されたのである。エンブはキクユのように望んで参戦したわけではなく、戦争に巻き込まれ、結果彼らが想定していたよりよい人生を奪われてしまったのである。エンブ男性は戦いに意味を見いだせないまま、収容キャンプで拷問を受け、彼らは心身ともに衰弱したまま故郷に帰還したのである。

マウマウ戦争後、植民地政府は戦争の発端となった土地問題に着手し、ケニア全域で土地私有化計画が実施された。土地改革はケニアが独立したあとも国の事業として引き継がれたが、しかしこれは戦争によって社会経済的に極めて不安定化していたエンブ社会にさらなる混乱をもたらした。前述したとおり、これをきっかけとして従来のエンブの慣習に則って人と土地を支配してきたクランの権威が崩壊し、その後エンブの人々はクランの権威にも依存できず、また村落レベルでは独立国家の近代司法にも依存できず、エンブの社会秩序は危機的な状況に至ったのである。

マウマウ戦争と土地改革。これら二つがエンブにもたらした社会的衝撃は大きく、エンブ社会を維持していた一つ一つの要素は綻びが生じ始め、さらに互いに連鎖反応をおこし、現在に至るまでエンブの社会構造を根本的に変えつつある。そして、不安定化するエンブ社会において、戦争によって希薄化した「男の甲斐性」は家族をとおして次世代に伝えられ、現代ではそれがシングルマザーの増大という現象で反映されている。戦争から半世紀たった現在、近代化の歩みとともに、人々は新たなエンブ社会を築きつつあるが、社会の土台となるべき家族が未だに揺れ動いている。

本発表はこのような観点からケニア・エンブ社会の動態を論じる。

【 マウマウ戦争、暴力、土地改革、「男の甲斐性」、シングルマザー 】